

ジョージア (グルジア) 便り その52 好青年なんて言われたくない

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ある晩餐会で芸術監督は僕のことを各国の大使たちやスポンサーの前でこう紹介した。

「彼はとてもよい青年です」

ありがたい褒め言葉ではあるがそこまで嬉しくはなかった。僕は「彼は魅力的なダンサーです」という言葉が欲しかったのだ。

舞台上に立ったときに、よい人間であるか否かは関係ない。よく踊りに性格があらわれるというが、結果として魅力的であれば観客は性格など気にしないだろう。自分勝手にわがままなアーティストのことをオペラ歌手になぞらえて「ディーヴァ」と揶揄するが、それだけの実力と魅力があるならばディーヴァであろうが僕は尊敬する。

自分で言うのもなんだが、僕は舞台上でも私生活でも好青年である。けれども僕は正直言って好青年であることに自分でも辟易しているのだ。さわやかな好青年に魅力を見出してもらえないならよい。だが僕は癖があっても色気のあるダンサーのほうが魅力的だと思う。技術に勝るダンサーよりも色気に

勝るダンサーのほうが何度でも観に行きたいとなるのが普通である。

ではダンサーの色気とはなんだろう？

観客の多くはマスキュリンなダンサーを求めている。外見的な男性らしさもしかりである。残念ながら欧米人に体格で劣るアジア人の僕には、なすべはないのだろうか。いや、それは女性と踊るときのサポートの安定感やエスコートのうまさや磨きをかけることで、男らしさは格段に増すはずだ。

そして一般的に色気のある人間は良い香りがするというのが定説である。しかし、舞台上から観客席まで香りを届けるのは難しい。嗅覚で嗅ぐ香りではなくて、第六感で感じる香りを僕は持たなくてはいけない。仕草の余韻であったり、優雅さそして空間の使い方があたかもその人の香りのように客席にオーラとなって届くのである。

最後に目ぢからの重要性である。流し目の美しさ、なにかを訴えかける力強さに観客は引き込まれていくのだ。

頭でわかっただけでもなかなか実践す

るのは難しい。

先日僕の友人に「あなたの目はパートナーに恋をしている目をしていない」と指摘を受けた。たしかに僕は形としてのパートナーリングや関係性を重視するあまり心からパートナーに恋しているフリをしていなかった。

まさに恋する男のほうが色気っぽいだろう。魅力的なダンサーになるにはなかなか険しい道のが待っているようだ。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

